

小児科がない医療施設で子どもの予防接種を担う外来看護師の  
実践力向上のためのアクションリサーチ  
志賀加奈子

## I. 序論

近年、急速に子どもの予防接種の種類が増えて複雑化・高度化する一方、小児医療は縮小しつつある。小児を専門としない医師や看護師も子どもの予防接種を担って小児保健へ貢献しているが、小児科がない医療施設の外来看護師は困難さを抱えている状況にある。

## II. 研究目的

小児科がない医療施設で子どもの予防接種を担う外来看護師の実践力の向上を目的とした。

## III. 研究方法

本研究はアクションリサーチとし、参加観察、半構造化面接、文書収集によってデータを収集して領域分析を行った。研究参加者別に経過を追って実践力の向上に関わる発言や行動を抽出した。本研究は日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会（承認番号 29-283）及び看護学研究科共同看護学専攻研究倫理委員会(承認番号 17-01)の承認を得て行った。

## IV. 結果

外来看護師9名を主要研究参加者、事務職や医師等を含む5名を補助的研究参加者とした。データ収集期間は2017年11月から2018年8月であった。

アクション前は、①子どもの予防接種に神経をすり減らす、②子どもの安全確保に悪戦苦闘する、③大人の患者への対応に追われる、④親子へ援助を繰り出す余裕はない、という実践状況であった。研究者は現場の状況に合わせてアクションプランを修正しながら、継続的に予防接種に立ち会い、実践モデル提示、質問への応答、教材提供、情報源紹介等を行った。また、スタッフの希望に基づく5回の学習会を経て、スタッフによる事例検討会と手順案の作成に至った。これらを通して外来看護師には、①子どもの安全を守る実践力の向上、②親子の負担を緩和する実践力の向上、③仲間と改善策を生み出す実践力の向上がみられた。

## V. 考察

小児科がない医療施設の外来看護師が小児看護実践を習得する際の特徴は、ロールモデルや最新情報を得にくいことによる高いハードル、子どもの予防接種に対する強い恐れと大きなプレッシャーの存在である。実践力向上の要因には、支援を現場のニーズと一致させる方法論的要因と研究参加者及び研究者の経験などの人的要因が考えられる。

## VI. 結論

本研究を通して、小児科がない医療施設で子どもの予防接種を担う外来看護師の小児看護実践力は向上し、予防接種における親子と医療者の安全性は高まり、子どもの苦痛や母親の負担の緩和にも繋がった。本研究の結果は類似した状況へ活用できる転用可能性があると考えられる。